



うのゼミ展、三度目のステップスギャラリーグループ展である。今回、宇野はキュレーションのみで出品はしなかった。出品はタテヤマアヤナ(1989-)、山原晶子(1985-)、濱野裕理(1986-)という、いずれも京都嵯峨芸術大学うのゼミの卒業生で、25歳を越した、デビュー仕立てというよりも中堅を目指す世代である。これは当然、宇野和幸という師匠からの脱却を目指す時期でもある。

宇野はフライヤでPALE=淡さを強調する。「淡い」という状態は、それに対峙するものに、より慎重にその深層にまでかかわることをおのずから要求する。しかし同時に、薄く軽やかな静かさや儂げな表面がそれを見過ごさせてもいる。(中略・引用者)淡くあるための宿命として、より多くのパワーやメッセージを持たざるを得ないということがいえるのかもしれない。」

タテヤマはパネルにアクリル・油彩の中型の作品を2点、紙にカラーインクの連作の小品を6点、パネルに油彩の小品を1点、山原は綿布にアクリル中型の作品を2点、小品を3点、濱野はパネルにアクリル(ラッカー含)中型の作品を4点、小品を4点出品した。それぞれの個性が際立ったが、やはり宇野が指摘する通りの「淡さ」が際立った。それを表面の滑らかさと言い換えてもいいだろう。

描かれる内容とマチエールは乖離しない。

入り口に飾られたタテヤマから、言及を始めよう。抽象的に広がる世界は、厚く塗られた画面に覆われている。ところが画面を覆っているはマチエールなのではなく、描かれている対象なのだ。そのため重要なのはテクスチャではなく、描くことでもなく、思考から画面に移行するタテヤマのイメージなのである。このイメージが幻想でも現実でもない次元の発想に結びつくことが、大切なのだ。

山原の作品は、入って右とその正面に向き合う作品である。詩的なモチーフが印象的な作品群ではあるのだが、単なる幻惑に陥ることなく確固たる画面が構築している由縁は、まるで陶器を磨いたかの如くの画面の浮き立つ感覚である。絵具がキャンバスに食い込むことが油彩の最重要な事項であったのが、ここでは全く反対の方法論が導き出され、描くことの可能性が十分に引き出されている。

濱野は画面ほぼ中央に地平線を張り巡らせ、そこに固定、若しくは漂う対象を描き、画面を安定させる。注意すべきはこの「安定」にある。濱野は決して安定を求めている。むしろ見る者が作品に入れば入っていくほど、不安になる。この不安はムンクやシュルレアリズムが抱える問題ではない。宇野の言う「深層」との関わりが実現されている。濱野の絵画は地の底へ深く落ちていく。

それでも三者は宇野の言葉を凌駕する必要がある。

